

# 開き直りの語学

## — 第3外国語としてのスペイン語 —

秦 隆 昌

私が香川大学で担当している「スペイン語」は教育学部の専門科目の1つで、主として同学部の総合科学課程言語文化コースの学生のために開設されたものである。カリキュラム上、卒業要件とはならない選択外国語の扱いを受け、現在のところ2単位の授業として隔年開講されている。いわゆる「第3外国語」という分類に入るものである。クラスは多い年でも10数名程度の少人数で、しかも、受講者の殆どが「言語文化コース」専攻生であり、彼らは英語8単位とその他の外国語8単位（ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語のうちの1つ）に加えて、更に私のスペイン語の履修を志す学生たちである。従って外国語に対する関心は高く、受講者の質的条件は恵まれていると言える。この授業は1990年度から開設され、現在に至っている。

一方、私は非常勤講師として岡山大学でもスペイン語を教えているが、こちらの方は文学部の専門科目の中で他の外国語（ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、ラテン語、韓国語）と共に「共通外国語」として開設されている。文学部の学生は卒業要件としての「共通外国語」4単位の中にスペイン語を含むことが可能である。一方、他学部の学生は、卒業要件とはならないが、希望すれば自由に受講できるようになっている。クラスの人数は多い年で20名程度である。年間2単位の授業という点で条件は香川大学の場合とほぼ同じである。

以下、1990年度及び1992年度の香川大学と1991～92年度の岡山大学の授業内容を中心にして、この種の授業の問題点を探ってみることにする。

### 1. 授業時間の制約とテキストの選択

私は他大学で長年スペイン語専攻の学生にスペイン語を教えたことがあるが、専攻外国語の場合は授業時間が十分に与えられているので、授業の進度について

窮屈な思いをしたことがなかった。これに対して現在担当している2単位ものの外国語は、1つの外国語の授業としては、おそらくこれ以上時間を短縮できないぎりぎりのものであろう。1コマ2時間（実時間は90分）の授業を週1回年間30週行うことを原則としているが、これですべてを終了させなければならない。この時間数では、少し油断をすると初級文法も終了できないで終わってしまう危険性がある。そのため常に進度を意識し、時間と勝負し続けなければならないことになる。

このような時間的制約を考えると、教材としては文法、講読、作文、会話などの内容別に分けられたものは使えない。結局すべての内容を1冊に盛り込んだオールラウンドなものを選ばざるを得ない。

まず、1990年度について見ると、使用したのは岡田辰雄著『岡田・初級スペイン語教本』（15cm×21cm, 80+21ページ）（芸林書房）である。これは教養課程の外国語のために作られた教科書で、全体を20課に分け、各課に4ページを割り当てている。第1課の「発音」を別にすると、文法を中心に訳読・作文を扱った部分は第2課～第20課の76ページ分である。週2コマ30週の授業時間を当てれば十分消化できる分量であるが、週1コマ30週のペースでは、たとえ一方で練習問題の一部を割愛しながらやっていくにしても、時間的に無理がある。結局そのままでは全体の半分を少し越える程度で1年が終わってしまう恐れが出てきた。そこで急ぎよ、重要な文法事項の説明と例文を簡潔にまとめたプリント（B5, 12ページ）を用意し、教科書で説明する時間のなくなった部分をこれで補うことにした。こうしてなんとか当初予定した初級文法の必要最小限の諸項目を一通り説明し、1年間の授業を終えることができた。

1991年度は、前年度の反省の上に立って、できるだけ分量の少ない、しかし必要事項は一応網羅している教材を探すことにした。幸い丁度その時期に新刊が予定されていた上田博人編『12課のスペイン語文法』（17cm×25cm, 35+16ページ）（白水社）の見本が出版社から送られてきた。一通り目を通して見て、よさそうに思えたので、これをテキストとして採用することに決めた。前書き、目次、巻末の「単語集」を除くと、文法・訳読・作文に割当てられた部分は正味30ページであり、『岡田・初級スペイン語教本』に比べると、判は少し大きいものの、全

体の分量は大ざっぱにみてその半分以下である。実際に使用してみた結果は、進度に関しては期待通りで、1年間で1冊を十分消化することができた。しかし、これですべてがうまくいった訳ではない。テキストのせいなのか、それともそれを使った私のせいなのか分からないが、授業が殺伐として潤いを感じられなかったというのが、率直な感想である。骨格だけを与えながら、肉付けをしたり、血を通わせたりすることができなかつたという印象がどうしても拭えない。このテキストでは各課が文法説明と訳読・作文練習から構成されているが、文法説明には例文がついていない。そのため文法説明が終わると、いきなり練習問題に移ることになるが、これでは受講者の多くは戸惑いを感じるのではないだろうか。そこでこれについては2通りの対策を考えた。1つは文法説明の後で私が別に用意した例文を示し、当該の文法事項が実際にはどのように適用されるかをあらかじめ理解させ、しかる後に練習問題をやらせることである。もう1つは、訳読の練習問題に出ているスペイン文を一部練習問題から外し、文法説明のための例文として使う方法である。これによって練習問題の分量は減るけれども、文法説明と実例文との関係を十分理解した上で練習問題に取り組むことができる。これらの工夫によって極端にスリム化されたこの教科書にも、少しゆとりを持たせることができたように思う。唯、このテキストに掲載されている訳読文の中には文法説明にも練習問題にも適していないと思われる諺や、初級の学習者にはやや難解な文章も含まれていて、いま少し改善の余地があるように思われるところもある。

第3外国語としてのスペイン語を始めて3年目になる1992年度は、過去2回の経験を踏まえて、更に考えを新たにし、教科書自体の分量をあまり問題にせず、以前週2回30週の授業でたっぷり時間をかけて使用したことのある岡田辰雄著『スペイン語の入門』（12.5cm×18cm、125ページ）（大学書林）を使うことにした。分量的には膨大で、全てのページにわたって逐一説明をしていくと、30コマの授業では、その半分も消化できないことは初めから分かっているので、初級受講者にとってあまり重要でない部分の説明はカットし、練習問題も一部省略していくことで、進度を速めながら授業を進めた。このテキストは1960年に初版を出し、1992年の時点で既に93版を出しているロングセラーで、それだけに各課の本文（スペイン語文）の内容はやや古めかしく見える。また、最近の教科書には必ず

ついている付属のカセットテープもない。にもかかわらずこれだけの版を重ねているのは、やはりそれだけ使用者に高い評価を受けているからであろう。全体で24課あり、各課は本文、文法事項、練習問題の順に配置されている。文法事項は各課で説明されるのが原則であるが、動詞の語形変化だけは巻末に「動詞活用表」としてまとめられていて、各課で扱う動詞活用は指示に従って巻末で見ようになっている。従って、動詞の変化は全体の中で体系的に理解するように配慮されている。文法説明のための例文も平易で、しかも精選されている。授業時間数に比べて分量が多いことや付属テープがない点を別にすれば、最も使い易いテキストの1つではないかと私は考えている。この教科書の使用にあたっては、先ほども述べたように、説明や練習問題の一部を省略して進度を速めたが、初級文法の実理解に必要な最小限の項目とそうでない項目をよく仕分けして受講者に示し、十分納得のいく形で1年間を締めくくることができた。

## 2. 窮屈な時間の中に求められる「ゆとり」

第3外国語の単位は卒業要件との関わりが少なく、受講してもしなくても卒業はできるので、途中で学習意欲を失い、教室を去った者は二度と再び戻ってくることはない。また、毎年一定数以上の受講者が集まるという保証はどこにもない。正直言って、評判が悪ければ受講者がゼロになる可能性もある。その状態が続けば授業そのものの廃止につながることもなりかねない。従って、授業担当者は受講者の興味・関心を持続させるためいろいろ工夫をして、魅力ある授業にすることを常に心がけなければならない。2単位ものの授業は時間的には全くゆとりがないのが実状であるが、しかし、そうした手の内をストレートに見せてはいけない。進度を急ぐあまり、語法以外のことは一切話さない単調な授業を続けていると、学生はたちまち授業に飽きてしまう。そこで、モノトーンになりがちな空気を入れ換えるため、貴重な時間を割いて話題を転じる必要がある。私がこういう時に使う話の種をいくつか紹介してみよう。

### ◦ 「スペイン語は学び易い」

ある外国語が他の外国語より学び易いということを論証するのは難しいし、私自身もスペイン語が他の外国語に比べて特に学び易いとは考えていないが、

少なくとも発音に関しては英独仏語よりはるかに易しいと思う。スペイン語の単母音は5つで、その1つ1つの音価が日本語のアイウエオと殆ど同じである。子音は一部日本人になじみのないものがあるが、その数は少なく、習得も格段難しいものではない。また、綴り字と発音の関係がかなり規則的で、いわゆるローマ字式に発音すればすむ場合が多い。日本人はあまり努力しなくてもスペイン語の発音をマスターすることができ、しかもネイティヴから発音がきれいだとよくほめられる。以上のことは事実なので、発音と綴り字を教える時にはこれらの点を強調することになっている。

。「スペイン語は広大な地域で使用され、歴史的・文化的に重要な言語である」

スペイン語は日本では明治以来主として商業・貿易のための実用語としての側面のみが強調されてきたが、欧米ではそのようなことはなく、歴史的・文化的に重要な言語の一つとして扱われている。この言語を公用語にしている国と地域は21を数え、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカの3大陸にまたがり、使用人口は3億にも達しようとしている。

以上の点を強調するため、年度初めの最初の授業で私はいつもスペイン語の系統、歴史、現状を話すことにしている。それから、これは将来試みるつもりにしているものであるが、ビデオ教材の活用が考えられる。今入手しているものの中でこの目的に使いそうなものを1つ紹介しておこう。

“¡Adelante!” (D.C.Heath and Company, Lexington, Massachusetts  
/Toronto, Ontario, 1989)

これはビデオテープ2本(両方合わせて3時間30分)にテキストと解説書がついたもので、全体で12課から構成されている。各課の場面は最初字幕なしで示され、全部が終わったところで、今度は同じ場面がスペイン語の字幕付きでリピートされるようになっている。この教材はもちろんスペイン語の会話とそれに関連する文法を教えるためにつくられたものであるが、スペイン語圏の文化的背景を理解させる目的で使用することもできそうである。その観点から各課の内容を整理してみると次のようになる。

第1課：スペイン語圏の広がりと言語使用人口(スペイン及びラテンアメリカ)

第2課：スペインの首都マドリード（文具店，喫茶店での会話）

第3課：マドリードの24時間（時間と生活）

第4課：スペイン語圏各地の風景と気候（メキシコのプエルト・バヤルタ，  
スペインのマドリード，エクアドルのキト，ペルーのリマ，アルゼ  
ンチンのラス・レニャス）

第5課：アメリカ合衆国サン・アントニオ（合衆国内のスペイン語／ヒスパ  
ニックの人々と文化）

第6課：アメリカ合衆国マイアミ（合衆国内のスペイン語／ヒスパニックの  
人々と文化）

第7課：マドリードの私立学校

第8課：スペイン語を話す人達の同好会

第9課：メキシコ（国）

第10課：メキシコ市

第11課：プエルトリコの首都サン・ファン

第12課：メキシコ市内の家屋

文化的背景を理解させるためには、画面説明のスペイン語のナレーションを日本語に訳すだけで十分であるが、受講者がそれまでに習得した知識ですぐ理解できるような簡単なスペイン文が出てきた場合には、それをメモさせて、ごく簡単な文章でさえも、実際の会話の中では十分役立つのだということを印象づけることが大切である。

上述したように、2単位ものの授業では常に時間が不足しがちである。その上にビデオ教材を併せて使う余裕などないはずだと考えるのが常識的であろう。しかし私は、多少文法説明などの時間を犠牲にしても、敢えてそれをやるべきだと考えている。

・「スペイン語と英語の語彙は同源のものが多い」

スペイン語と英語は同系の言語であり、共にインド・ヨーロッパ語族の一員であるが、両言語の関係はそれだけに留まらない。もっと重要なことは、英語が比較的近い過去（12世紀以降）に（ノルマンの）フランス語から多くの語彙

を借用した事実である。こうして英語の一員となったラテン系の語彙はスペイン語と起源を共有し、語形も類似している。

このことに関連して、私は授業の中で該当する単語が出てくる度に語源を説明し、両言語のつながりを強調することになっている。スペイン語の *importancia* 〈重要性〉, *momento* 〈瞬間〉, *aire* 〈空気〉, *animal* 〈動物〉, *color* 〈色〉などは、教師が黙っていても学生の方で同源であることに気づいてくれるレベルのもので、これは言ってみれば第1水準の同源語である。これに対して第2水準の同源語は、教師の方であらかじめ説明しないと、受講者がそれと気づかないレベルのものである。これには次のような例が該当する。

| (スペイン語)      | (英語)        | (日本語との関連)  |
|--------------|-------------|------------|
| fin 〈終わり〉    | final 〈最終の〉 | 「フィナーレ」    |
| mar 〈海〉      | marine 〈海の〉 | 「マリーンライナー」 |
| ocultar 〈隠す〉 | occult 〈密教〉 | 「オカルト」     |
| vida 〈生命；生活〉 | vital 〈生命の〉 | 「バイタリティー」  |

この第2水準の同源語は、英西両語形の関連について意外性があり、学生により強烈な印象を残す効果が期待できるものである。幸いなことに英語がフランス語から借用した語彙は、受験生が大学受験のために覚える英単語の中に数多く含まれている。また英語を介して日本語に入った外来語とも関連を持つ場合が多い。

以上のような話の種をいくつか用意しておいて、適宜それを授業の中に挿入していくことになるが、ビデオ教材まで活用するとなれば、かなりの時間が必要になるかも知れない。本来時間的に余裕のないこの種の授業の中で、時間の無駄遣いを抑えることと、ゆとりの時間を作ることは、一見相容れない事柄のように見えるが、この両者の調和を図ることは不可能ではないと思う。

### 3. 結 び

第3外国語として2単位限りのスペイン語を教えるに当たっては、外国語教授法の一般原則には反するかも知れないが、ある種の割り切り、開き直りが必要であると私は考えている。その場合にはスペイン語に関する知識を余すところなく詰め込むことに汲々とするよりも、ある程度ゆとりが感じられる雰囲気の中で授業を進め、何よりも受講者がこの言語についてよい印象を持つように努めなければならない。そして、彼らが将来スペイン語圏に行く機会が与えられた時、あるいは仕事、研究、個人的興味などで再びスペイン語を本格的に学び直す必要を感じた時には、自力で、より高度な語学力を身につけることができるように、前もってその素地を植え付けておくことが肝要であり、このことを授業の第一目標に置くべきだと考えている。